

コンパニオンアニマルから考える人工主体との関係

竹下 昌志 (Masashi Takeshita)

北海道大学大学院情報科学院 / 日本学術振興会特別研究員

人間は人間以外の存在と友人になれるのか、なるべきなのかについて、ロボット倫理と動物倫理のそれぞれで議論されている。例えばロボット倫理では、ロボットの技術的問題が解決し人と変わらない行動ができるようになれば友人になれるのかについて肯定的 (Danaher, 2019)、否定的 (Nyholm, 2020) 議論のそれぞれがある。さらに、仮に友人になれるとしても、それは人間と友人関係になる上で有害な影響を与えかねないため、友人になるべきではないという議論がある (cf. Danaher, 2019)。また動物倫理では、犬や猫と飼い主の関係を友人関係として捉えられるか、捉えられるとしてそう捉えるべきか、それ以外の関係として捉えるべきかという議論がある (Abbate, 2022)。だがいずれの議論も、人間と人間以外の存在 (ロボットと非ヒト動物) との関係についての議論であり、人間以外の存在同士の関係についての議論ではない。

本報告では、人間と人間以外の存在との関係の既存の議論を参考に、人間以外の存在同士が友人になれるかどうかを議論する。特に、犬とロボットの関係に焦点を当て、犬はどのような種類のロボットと友人になれるのかを検討する。

本報告前半では既存の議論を整理する。まず、友情関係一般について整理する。友情関係の議論をする多くの者がアリストテレスの友情関係の三分類を参照しており、本報告でもこの分類にしたがう。アリストテレスによれば、友情関係は実用の友情関係、快楽の友情関係、徳の友情関係に区別される。実用の友情関係と快楽の友情関係は、その関係が実用的な利益や快楽をもたらすがゆえに築かれるものである。一方で徳の友情関係は、相互の賞賛を含み、価値観を共有する関係であり、善き生の重要な部分になる。

ロボット倫理と動物倫理のどちらにおいても、ほとんどの者が人間は人間以外の存在と実用または快楽の友情関係を結べることを認めている。一方で、徳の友情関係を築くことができると主張する者は少ない。ロボットと犬のどちらにおいても、必要な認知能力が欠けていることや、地位や権力関係が平等でないなどの理由によって人間とは徳の友情関係を築けないとされる。特にロボットの場合には、技術的問題が解決したとしても心が欠けているために徳の友情関係を築けないとされる (Nyholm, 2020)。また犬の場合には、犬は飼い主から一方的な仕方に関与されるため、徳の友情関係に必要な相互的な関係が欠けているとされる (cf. Townley, 2017)。一方で、人間は人間以外の存在と徳の友情関係を築くことは可能であると主張する者もいる (Danaher, 2019; Townley, 2017)。

本報告後半では、前半の整理に基づき、人間以外の存在同士、特に犬とロボットが徳の友情関係を築くことができるかどうかについて検討する。まず、近年研究されているアニマル・コンピュータ・インタラクション (Animal-Computer Interaction: ACI) の研究を参照し、犬が人工物に対してどのような振る舞いをするかを整理する。犬は社会的人型ロボットの指差し (pointing) を理解できる可能性が示唆されているが (Lakatos et al., 2014)、一方でロボットの

動作に対してネガティブな反応を示すこともある (Morovitz et al., 2017)。また犬型ロボットの AIBO と犬とのインタラクション実験では、統計的に統制された実験ではないが、犬は AIBO と良好な関係を築くことができる可能性が示唆されている (ロボスタ編集部, 2018)。こうした研究に基づき、犬とロボットが友情関係を築くことが可能かどうかを検討する。本報告前半の議論によれば、人間以外の存在が人間と徳の友情関係を築くことができない理由は、人間と同等の認知能力を有していないことや、地位や権力関係が平等でないことなどであった。しかし犬とロボットの場合、ロボットに必要とされる犬と同等の認知能力は人間とのそれより低次なもので十分であり、また地位や権力関係においても人間とのそれより平等だと思われる。こうしたことは、犬とロボットが徳の友情関係を築くことができることを支持する。しかし、少なくとも現状の技術レベルでは犬がロボットを真に友人であると認識することは難しいとして、最後に今後のロボット技術の発展すべき方向性を述べる。

以上のように、人間と人間以外の存在との友情関係の議論から、人間以外の存在同士の友情関係に議論を移すことで、友情関係の議論に新しい観点を導入できると考える。またそれによって人工主体についての議論に貢献できると考える。

文献

- Abbate, C. (2022). The Animals in our Living Rooms: Friends or Family?. In Jeske, D. (ed.), *The Routledge Handbook of Philosophy of Friendship*, Routledge.
- Danaher, J. (2019). The philosophical case for robot friendship. *Journal of Posthuman Studies*, 3(1), 5-24.
- Lakatos, G., Janiak, M., Malek, L., Muszynski, R., Konok, V., Tchou, K., & Miklósi, Á. (2014). Sensing sociality in dogs: what may make an interactive robot social?. *Animal cognition*, 17(2), 387-397.
- Morovitz, M., Mueller, M., & Scheutz, M. (2017). Animal-robot interaction: The role of human likeness on the success of dog-robot interactions. In *Proceedings of the 1st International Workshop on Vocal Interactivity in-and-between Humans, Animals and Robots (VIHAR), London, UK* 29-30.
- Nyholm, S. (2020). *Humans and robots: Ethics, agency, and anthropomorphism*. Rowman & Littlefield Publishers.
- Townley, C. (2017). Friendship with Companion Animals.’. In Overall, C. (ed.), *Pets and People: The Ethics of Companion Animals*. Oxford University Press.
- ロボスタ編集部 (2018) 「犬型ロボット「aibo」、本物の犬から仲間として認識 ソニーが実験」.
URL: <https://robotstart.info/2018/07/26/aibo-dog.html> (2022年10月5日閲覧)